奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

令和五年五月度　入賞句一覧

投句数　六百六十九句

一般の部

名和　永山　選

特選

春宵の一刻の色惜しみけり　　三重県四日市市　井戸　康子

春の夕焼けの色は実にきれいである。秋の夕焼けの真っ赤な色とは違って、赤や紫などがグラデーションとなり、西の山を飾る。同時に夕空の下の街も、刻一刻と夕日の色を受けて変わっていく。いつしかその色もなくなり薄暮となる。「春夕焼」の景を、ものの見事に詠んでいる。座五の「惜しみけり」に、想像以上の感動を得た作者の思いが伝わる。それほどまでに素晴らしい情景であったのだ。

花人に紛れて木因芭蕉翁　　北海道札幌市　藤林　正則

花人に紛れて誰がいるのかと思えば「木因と芭蕉さん」である。思いがけない発想に脱帽。大垣の俳人木因、そして句友の芭蕉。記念館前には二人の銅像が並んでいるが、その二人が花人に紛れていると。芭蕉さんが花見の時期に大垣に居たかは定かではないが、実際に皆さんと一緒に花見をしていたとするなら、これもまた愉快ではないか。「芭蕉さん、船町の桜はいかがですか？」と聞きたくなる。

飛んだのは気のせいかしら豆の花　　京都府京都市　石田　吉之助

季語「豆の花」は一般的には蚕豆や豌豆を言う。この句は「飛んだのは気のせいかしら」と「豆の花」の取合わせの句として鑑賞すると、作者の発想の柔らかさがうかがえる。目の前を飛んだのは虫かもしれないが、「いやいやサヤの中の豆が飛び出したのではないかな」と思ったという、実にユニークな作品である。中七の「気のせいかしら」が面白い。だから「豆の実」ではなく、まだ実の入っていない「豆の花」に想像の幅を広げたのである。

秀逸

霾天や城の矢狭間の薄明かり　　東京都武蔵野市　伊津野　均

囀りやパンのおいしい喫茶店　　養老郡養老町　松永　智志

お呑みやす一期一会の新茶かな　　安八郡輪之内町　野村　照子

峠茶屋初夏の香りを売りさばく　　東京都狛江市　椎野　一恵

髪染めてこころ晴れやか亀が鳴く　　大垣市　平野　睦

大垣の湧水美味し新茶古茶　　海津市　水谷　勲一

春光を回す秒針花時計　　大垣市　新町　恵子

父母眠る峡よ海棠花盛り　　大垣市　吉田　てるみ

寡黙とて「あうん」の呼吸亀鳴けり　　各務原市　桑原　緑

製糸場桜蕊踏む人もなし　　本巣市　土川　楽人

入選

桜蘂降る船頭の丸き背　岐阜市　関谷　恭子

漲れる大地の息吹桜咲く　揖斐郡大野町　豊田　美見

薫風や振り返る髪艶やかに　大垣市　浅野　照章

シャボン玉あなた任せの風に乗り　岐阜市　村瀬　充夫

賑はひし城下老舗の桜もち　大垣市　傍島　隆

春水と戯れてゐるたらい舟　愛知県名古屋市　児玉　裕幸

みどりの日美濃路やさしきおらが郷　神奈川県平塚市　浅井　伸一朗

初めてのお絵書空とチューリップ　大垣市　岡田　あや子

疾風に泣く子も笑ふ風車　大垣市　水上　洋子

矢車や子らの声消し堂々と　本巣市　山田　香山

老衰という個性知る麦の秋　大垣市　川瀬　恭子

山肌を隠す青葉が時を告げ　大垣市　土屋　和馬

お浄土の君すまふごと春夕焼　養老郡養老町　佐藤　咲楽

一雨にいのち滴る春の草　滋賀県甲賀市　奥村　僚一

納骨の嫗にばかり蝶は寄る　愛媛県八幡浜市　河野　しまのなまえ

晩年へ刻とどまらず松落葉　三重県四日市市　後藤　允孝

蜆舟湖の夕日のしたたれり　三重県三重郡　水野　悦子

春愁のキリンは首を持て余し　福岡県福岡市　大津　英世

始まりはドミソの和音鳥の恋　安八郡安八町　渡辺　やちよ

大袈裟にあれやこれやと言う雲雀　海津市　安藻　ないと

選者吟

思ひ出の褪せぬままなる赤き薔薇　永　山

一般の部